

## 関連分野における若手研究者への働きかけ

## Actions to encourage young scientists in related fields of JSIDRE

西村 拓

Nishimura Taku

## I. はじめに

水土の知 2015 年 3 月号の数字では、学会員約 9000 人中、学生会員は 3%に満たない。同様に職域の学会である地盤工学会でも学生会員は 8100 人中 640 人程度である。職に就いている若手会員を含めると数が増えるが、学会員の年齢構成が高齢側に偏っていることは明らかである。分野の性格が異なるが、日本生態学会は会員数約 4000 人の 25%を学生会員が占める。今後、当学会が科学・技術に関する知識・情報を生み出す組織として活躍するためには、若い会員を充実することが必要と思われる。本稿では、農業農村工学に関連する周辺分野の学会で若手会員に対する、研究助成を除いた働きかけについて情報を収集してみた。対象は、日本農学会加盟学協会ならびに水文、土壌関係の学会から適宜選び、情報は主として定期刊行誌ならびにホームページから収集した。

## II. 若手会員への働きかけの形式

農業農村工学関連学協会では、アウトリーチの目的で組織的に初等・中等教育への関与を試みる場所は多々あっても、学生会員や若手会員を対象とした委員会・部門を設けている所は少ない。そこで、学会として組織的に取り組んでいるもの、有志の集まりに依存するもの、イベントを主体とするものにおいていくつか例を紹介する。

## 1. 組織的な取り組み

地盤工学会では、事務局の会員・支部部の下に「男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会」を設置している。また、同学会関東支部会員サービスグループでは、後述する学生対象のイベントを行っている。男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会は、文字通りの男女共同参画だけではなく、若手の意見を吸い上げることを意図した若手ワールドカフェや座談会の開催を行っている。活動例として学会大会時の特別セッションが以下のサイト([http://www.jiban.or.jp/file/kaishi/26-11\\_12/HP-p005.pdf](http://www.jiban.or.jp/file/kaishi/26-11_12/HP-p005.pdf))に報告されている。

日本生態学会では、学生会員が多いことを考慮し、「キャリア支援専門委員会」を設置し、ここが主導して、学生会員の社会進出（要は就職）に関する問題提起や全国大会時のキャリア支援フォーラムの開催を 2008 年から継続的に行っている。

学会として公式の組織が無い場合でも、作物学会や日本生態学会では其々、「若手の会」と称する有志のグループがセミナーや懇談会を行っている。たとえば、作物学会では、2014 年に若手の会企画で「学生・若手研究者の進路選択をサポート ドクナビ!」や「みんなでリサーチシェアリング。僕の・私の研究ライフ」というテーマの小集会を開催し、研究者キャリアのケーススタディや「引用文献の探し方」といった基礎的な事項から、「研究室におけるゼミの取り組み」、「研究者としての人生」といった興味はあってもなかなか知る機

東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Sciences

キーワード：キャリアパス、若手支援、学生会員

会のない情報をテーマとした議論を行っている（鎌田他，2014，出口他，2014）。

## 2. 学会業務への関与

全く異なる取組として、学会業務への学生会員の参加がある。近年流行している企業のインターンシップ制度と類似し、学会活動への理解の深化や共感が期待できる。具体的には、学会誌学生編集委員への選出や学会誌モニター員としての活動（地盤工学会）、学会誌における常設コーナーの執筆（水文・水資源学会）等がある。ただし、この試みは、物理的に一部の学生会員に限定される活動であることは否めない。

## 3. 大会開催時のセミナーやイベントの開催

近年、大学内でも学生間の結びつきが希薄になっていることが指摘されており、学会の学生会員間においても同様であると推察される。この点を問題とし、イベントの実施によって、学生・若手会員同士を知り合いにし、活気づけようという試みがある。農業農村工学会で1996年から続いているサマーセミナーもその一つである。同学会の土壌物理部会では、近年途絶えているものの、以前、若手研究者の研究紹介をテーマにする部会集会を連続的に開催していた時期がある。土壌肥料学会でも毎年ではないが、全国大会後に2泊3日程度で土壌調査や意見交換、セミナーといったメニューの「若手の会」を開催している。

工学系のロボコンの様に国際土壌科学連合(IUSS)国際会議(WCSS)のSoil Judge Contest([http://jssspn.jp/Eng/ISJC\\_report\\_eng.pdf](http://jssspn.jp/Eng/ISJC_report_eng.pdf))や地盤工学会関東支部が中心となっている学校対抗ソイルテクスチャーコンテスト([http://www.jiban.or.jp/kantou/report/pdf/20131026\\_soilreport.pdf](http://www.jiban.or.jp/kantou/report/pdf/20131026_soilreport.pdf))といった学生対象の競技会を開催する試みもある。Soil Judge Contestは、各国からの学生チームが土壌調査の評価・報告の的確さを競うコンテストで日本チーム（北大，京大，筑波大連合）は2014年の第1回コンテスト開催時に3位に入賞した(<http://pedology.ac.affrc.go.jp/soiljudging2014/together.jpg>)。ペドロジスト学会の若手向けペドロジストトレーニングコースも学びと同時に知己が増える効果がある。

研究者としての就職は、大学院生にとって重要な関心事である。日本生態学会や作物学会では、上述したキャリアパス支援のフォーラムや小集会を大会時に開催している。当学会からの参加者も少なくないJpGU（地球惑星科学連合大会）では、「任期付研究員制度が抱える問題」（2015）に加えて、女性研究者・技術者の増加を鑑み、「地球惑星科学系研究者のワークライフバランスとキャリア形成」、「イクメンの勧め」（いずれも2014年）、「育児からの気づきと育児へ気づき」、「若手研究者の育児と異動」、「地球科学系の学会・野外調査への子連れ参加の可能性」といったテーマで議論を行って来た。これらは、インターネットで”JPGU〇〇〇〇”（〇は、西暦年）で検索した大会サイト内でパブリックセッションのページにアクセスするともう少し詳しい情報が得られる。

## III. さいごに

定員削減の進む中、独法研究機関でも大学でも人数が減り、同じ分野の研究者が周囲にいないとは限らなくなってきた。若い研究者にとって孤立は非常に厳しい状況である。この環境で生き残るため、さらに楽しく仕事をするためにも、若手の間のネットワークを密に構築することをサポートする手立てを考える必要があるように思われる。

引用文献：鎌田他(2014)日作紀(Jpn. J. of Crop Sci.) 83(4):382 出口他(2014)日作紀(Jpn. J. of Crop Sci.) 83(2) : 174-180